

『おつきな人間 ちっぢやな人間』

岡安 伸治

今日のお話は「おつきな人間ちっぢやな人間」というお話です。

さあ、今日の朝お父さんお母さんに「おはよう」って言えた？  
道で友達に会つて「こんにちは」って言えますか？

「おはよう」「こんにちは」ってどこの言葉ですか？  
日本のかいさつの言葉ですか？

じや、外国の言葉で「おはよう」「こんにちは」って何か知つてます？  
隣の韓国とか北朝鮮っていう国では「アンニヨン」「アンニヨハセヨ」「アンニヨハシムニカ」って言います。

その隣の中国では「ニーハオ」

そひから下におりるとインド。インドの国では「ナマステ」

それからアフリカのケニアという国では「ジヤンボ」って言います。

そして日本では「おはよう」といつて、こうやつておじぎをするけど、外国ではどうしますか？  
握手したり、抱き合つたりしますね。

今日の朝、ご飯たべた？ 箸、上手に使える？

箸使わずに手で食べる人？  
でもインドの国では、カレーなんかを手で食べるんですね。

手の上にご飯のつけて、カレーつけてこうやつて食べちゃう。

それからアメリカとかヨーロッパの人たちは、ナイフとフォークを使つて食事をします。

でもどうして食事の仕方が違つたり、かいさつの仕方が違つたりするのでしょうか？

ほら、地球にはいろんな国があつて、いろんな人が暮らしている。  
顔の色が黒い人、白い人、茶色い人、黄色い人、いろんな人が暮らしている。

そして地球は、この大地がてきて、これ。

バツクの絵をつかいながら

さあ、地球はこの大地がてきて、これは？ 火山が噴火したり、カミナリがなつたり、カミナリがなる

とやがて雨。

雨のあとには虹。

寒い冬には雪。

やがて春、花が咲いて山は緑になつて、木は伸びる。

太陽の陽を浴びてさらに伸びる。

雨は川となつて湖をつくり、海に流れていく。

そして、その海は世界中をかけめぐる。

世界の人たちは、いろんな仕事をしてますよね？  
例えばこれ、木を植えたり切つたりする仕事。

畑とか田んぼを耕して、米とか野菜をつくる仕事。  
家を造る仕事に、船にのって魚を釣る仕事。

それじや、おじさんの仕事は何だ？

おじさんの仕事は、この絵一枚でいろんなお話を見てもらう。例えば、太陽さんが月のウサギさんを好きになつて、いいところまでいったなあという時、ライオンが横取りした話とか。おじいちゃんが、若くなりたくて若返りのリンゴをたくさんたべたら、赤ちゃんになつてしまつたお話をとか。

たくさんのお話をしながら旅をする。

そして、カンカン照りの日は、この傘をさして旅をして。  
雨の日もこの傘をさして旅をします。

それから、この古いトランクの中に何が入っているかというと…

これは、お話を使うの。こうやってやると、割り箸。これは？ 齒ブラシ。クシ。ちよんまげ。

これ、ラジカセ。

これで音楽を聞いて、夜はぐっすりと眠ります。

みんなね、一人ぼっちでいる時寂しいことない？

おじさんは、ないぞ。だつてね、おじさんの中に「ちっちやな人間」がいるから。

今日は、その「ちっちやな人間」のお話をこの絵を使って、これから始めたいと思います。

これから始まるお話は、昔々のそのまた昔のお話。  
でも、いつたいどのくらい昔だろうか？

何の声？ 恐竜の声。でも、ジェラシックパークのお話じゃありません。恐竜のお話ではありません。

まだ神様が、この地上とか空の上を飛び回っていたころの古いお話。  
あるところに、それはそれはおつきなおつきな人間と、それはそれはちっちやなちっちやな人間がありました。

おつきなおつきな人間は、ふたまたぎもすると日本の国を北海道から沖縄の方までいってしまうほどだった。  
おつきな人間は、今のインドの山、あのヒマラヤだ。インドの山にもたれては、中国の方へ足をなげだして、毎日することもなく棒で日本海を、ペチヤンペチヤンと叩いてはすごしていた。

「エへへ…」  
すごいね！

神様は  
「やれやれ、何ということだ…」

雲の上へによつきりと出ている大きな目玉をみて、そんなおつきな人間を創つてしまつた神様は、えらく自分の失敗になさけない日々をおくつていた。

「なんであんなおつきな人間を創つてしまつたのか。ばか：」

「おーい、おつきな人間よ」

「おーい、こつちを向けおつきな人間」

「： なんだクシヤミカ」

「あらつ？」

そんないある日、神様の耳に地上のどこでやら小さな小さな声で「神様、神様」と呼ぶ声が聞こえてきた。

「あれれ、どこでやら声が：」  
「と思って雲の下をのぞいてみると。

山の大きな一本杉の根元のところにちつちやなちつちやな人間が、その大きな杉の木のてっぺんに向かって、願い事をしているではないか。

「私は、小さくて小さくて、こんな米つぶにもたりない、風に吹かれて飛んでいくタンポポの種より軽い小さな小さな人間です」

「ありやりや：」  
と神様はひたいに手をあてて、思わずためいきをついた。

これは神様がその昔、自分で創つておきながらあまり小さすぎるというので、ぱいとほおつておいたのをすっかり忘れていたんだ。

「どうか、大きな杉の木のその上の、その雲の上の方のずっと上方にいる神様、お願ひです。こんな小さな小さな私のたつた一つのお願いです。こんな小さく創られたことをうらみに思いません。ですがど、友達がいないのが一番つらいのです。アリにだつて負けません。大蛇のようなミミズにだつて負けやしません。どんな大きなクマだつてへつちやらです。だけどだけど：」

その小さな小さな瞳に大きな大きな涙があふれていた。

神様は  
「いやいや私としたことが、修行がたりんで色々なものを創つてしまつたがここにも、こんなところにもあつたのか：」  
とまたまた大きなためいきをついた。

おつきな人間は動きまわると海や山は嵐に、砂漠は砂あらしがおこつたりするので、おつきな人間ばかりめだつて小さな方をすっかり忘れていた。

と、あらためて耳をすませると。  
大きな杉の根元のこけの花の間から、その声は聞こえている。

「だけどだけど： どうか、どんなことでも話せる友達を下さい。もし下されば、その友達とどんなことでも一緒にがんばりぬいて、りつぱに生きていきます。お願ひです。こんなちつちやな私のたつた一つの、一つのお願いです。どうか神様」

とうとう小さな瞳から、涙がこぼれ落ち、こけの白い花びらをほんの少しだけぬらした。  
でも、小さなしづくの音は神様の心に、それはそれは大きく大きく広がった。

「これは困った。だいたい今までだと、願い事というと例えば、カエルはグログロ、グワグワという自分の鳴き声が気に入らないからかえてくれとか、カラスは黒でなくシルバーにしてくれとか、セミは土の中に五年も六年もいるのは我慢できないとか、一年ごとに恋をしては片思いで真っ赤になるモミジは、春にも恋をさせてとか、みんな勝手ばかりをいう」

しかし、このちっちゃな人間のことはそれとは違う、なんとなく心ひかれるものがある。

神様も自分の失敗の事もあるので、なんとなくその願をきかなければいけないのではないかと思った。そこで、雲の上にぼんやり顔を出しているおつきな人間を、そのちっちゃな人間にひき合わせてみようと考えた。

おつきな人間に声をかけようとして近づくと、そのおつきな人間はイソギンチャクやヤドカリみたいに、すっと雲の中へ顔を引っ込めてしまう。

氣をつけて近づかないと臆病者のおつきな人間は、慌てて立ち上がつたりして、海へ足を入れたひょうしに大津波を起こしたりしてしまって大変だ。

この間もなんと神様のあくびに驚いていきなりかけ出し、太平洋の海の底の火山帯をふんずけたものだから、火山が何か所も噴火して島が幾つも出来上がつてしまつた。それで出来たのがハワイの島だ。

はてさて、どうやつておつきな人間とちっちゃな人間をひき合わせたらよいものやら。ちっちゃな人間は小さすぎておつきな人間には見えないし、これは大きすぎてちっちゃな人間にはおつきな人間が見えない。

「はてさて…」「どうしたらよいものやら…」「これだ！」

そこで神様は、ちっちゃな人間に大きな杉のてっぺんに登り、おつきな人間を大きな声で呼ぶように命じた。

「おーい、ちっちゃな人間、おーい」「えつ？… 登る！ 登る！」「こんな高い木、登れないよ」「えつ、本当。友達を。登る登つてみる」「わあ、やつたあやつたあ！」

虫の声にかき消される様なちっちゃな人間の声だが、それでもうれしくてうれしくて何日もかかって杉の木のてっぺんに登りつくと、目を輝かせておつきな人間を呼んだんだ。

「おつきな人間さーん、おつきなおつきな人間さーん！…」

初めのうちはおつきな人間の大きな耳には、ちつちやな人間の声は届きませんでしたが、幾度となく雪が降り。

「おつきな人間さ・さ・さ…」

「おつきな人間さ・さ・さ…」

「ハクション！」

「わあっ！」（落ちそうになつて）

幾度となく花が咲き、杉も大きくなると、ちつちやな人間の声もだんだん大きくなり、おつきな人間の耳にも届くようになり、臆病者のおつきな人間も少しずつ少しずつそちらの方へ近づいていくのだった。

そして、とうとうある日どんどん近づいて、ちつちやな人間のいる杉の木の山に大きな耳をおしあてた。

ちつちやな人間にとつて、それはまるで天にフタをしたように見えた。

「わあー、全部耳」

「よーし、いくぞ。一、二、三、それ！」

そこでちつちやな人間は、ぴょこんとおおきな人間の耳の中に飛びうつり、耳の奥へ奥へと入つていつた。

どんなに声が小さくとも耳の奥へ入つていけばもつとよく聞こえるから。

「聞こえるかい！…」

「聞こえないのかな…」

「もう一回、もう一回」

「おつきな人間さん、聞こえるかい！」

「ああ、聞こえるとも」

「わあ、やつた！」

「聞こえた！　聞こえた！」

ちつちやな人間は、うれしくてうれしくて踊るように走つていった。

じや、ちょっとおじさんが踊つてみるから、きつとこんな風に走つていったんだ。

踊りを踊る

こんな風に走つていったんだよ！

さて耳の一番奥までくると ureしさのあまり、どこかにいる神様に向かつて思いつきり大きな声で。

「神様！　ありがとうー！」

と思わず叫んでしまつた。

杉の木の年輪が数えられないほどおつきな人間を呼び続けていたので、昔よりずっとずつと大きな声に

なつていたのをすっかり忘れていた。

だからおつきな人間の頭の中は

「神様、神様、神様、神様…」

「ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう…」

大つりがねをうち鳴らしたようになり、びっくりしたおつきな人間は、うわっとばかり立ち上るとめくらめっぽう走り出した。

さあ大変だ。

「やめろ！」

地上はめちゃくちや。

地震やカミナリ、大津波がおきて大変だ。

慌てて神様が後を追つて静めようとするが

「こら！ おつきな人間、静まれ！ 止まれ！」

そんなことではとてもとても。

「大つりがねだ。頭の中に大つりがねだ！」

ほとほと困つて神様はついに、今まで誰も見たこともない大きな大きなカミナリを

「えいっ！」

とばかりおつきな人間に投げつけた。

「ピカツ！ ゴロゴロ！ …」

「うわっ！」

それはとてつもない大きな音と光をともなつたもので、まるで天がまつ二つに割れんばかりのようだ。おつきな人間もこれにはかなわない。

この世の終わりのような大きな声を出したかと思うと、そのからだはこなごなに星くずのように七色に光つて世界中に散らばつた。

そして神様は、もう二度とこんなことが起こらないようにと、世界中に散らばつたおつきな人間のからだから、今の大きさの人間が生まれた。

ほら、あいさつの仕方が違うとか、食事の仕方が違うとか、皮膚の色が違うとか、そんな今の人間が創られた。

でも、あいかわらずちつちつな人間は、今でもそれぞれの一人一人の耳の奥にいて、昔の神様との約束を守り。

誰かが臆病になると

「弱虫じやないぞ」

誰かが悪いことをしようとする  
「いけないよ」  
とか

そして独りぼっちで寂しい時は  
「ぼく、ここにいるよ」  
と言つたりする。

でも、今ではちつちやなちつちやな人間も昔のことにこりて、決して大きな声は出さない。  
なぜつて、おおきな人間みたいにみんなが大あばれしたら大変だもん。

そつときさやきかける。  
そして、不思議なことに心から楽しいときやうれしいときは、ちつちやな人間の声は聞こえない。  
なぜつて、きつとそれはちつちやな人間もいつしょに笑つてているからなんだ。

これがおじさんの「ちつちやな人間」のお話。

みんなの中の「ちつちやな人間」元気ですか？ 笑つてますか？

今度会うときは、この絵の中から他のお話をつくつて、また会いたいと思います。  
おじさんこれから他の所でお話をします。  
今度会うときまで、みんなの中の「ちつちやな人間」たいせつに。仲良くし下さいね。

幕